

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	I 用法用量	J 効能効果	
		薬理作用	相互作用						重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性				適応禁忌
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の 症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの				使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ		
抗ヒスタミン成分	塩酸ジフェニルピラリン 注	抗ヒスタミン作用及び抗アセチルコリン作用		中枢神経抑制剤・アルコール・モノアミン酸化酵素阻害剤(相互に作用を増強)	ショック、アナフィラキシー様症状(頻度不明)		0.1~5%未満(眼気、頭痛)、頻度不明(排尿困難、めまい、けん怠感、神経過敏、口渇、悪心・嘔吐、下痢、便秘、喀痰増出困難)、自動車の運転等危険を伴う機械の操作	頻度不明(過敏症)	本剤の成分過敏症の既往歴のある患者、緑内障、眼内圧を上昇、前立腺肥大等下部尿路に閉塞性疾患(排尿困難、尿閉等)	高齢者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人				通常成人1回1~2管(塩酸ジフェニルピラリンとして2~4mg)を1日1~2回皮下又は筋肉内注射する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	皮膚疾患に伴うそう痒(湿疹・皮膚炎、皮膚そう痒症、小児ストロフルス、薬疹、中傷疹)、じん麻疹、アレルギー性鼻炎、感冒等上気道炎に伴うくしゃみ・鼻汁・咳嗽
	マレイン酸カルピノキサミン	なし													
	d-マレイン酸クロルフェニラミン	ボララミン錠 2mg 作用	抗ヒスタミン作用	中枢神経抑制剤・アルコール・MAO阻害剤・抗コリン作用を有する薬剤(相互に作用を増強)、ドロキシドパ、ノルエピネフリン(血圧の異常上昇)	ショック(頻度不明)		5%以上又は頻度不明(鎮静、神経過敏、頭痛、焦燥感、複視、眼気、不眠、めまい、耳鳴、前庭障害、多幸症、情緒不安、ヒステリー、振戦、神経炎、協調異常、感覚異常、霧視、口渇、胸やけ、食欲不振、悪心、嘔吐、腹痛、便秘、下痢、頻尿、排尿困難、尿閉等低血圧、心悸亢進、頻脈、胡外収縮、鼻及び気道の乾燥、気管分泌液の粘性化、喘鳴、鼻閉、溶血性貧血、肝機能障害(AST(GOT)・ALT(GPT)・Al-Pの上昇等)、悪寒、発汗異常、疲労感、胸痛、月経異常、0.1%未満(血小板減少)、眼気を	5%以上又は頻度不明(過敏症)	本剤の成分又は類似化合物に対し過敏症の既往歴、過敏症(緑内障の増悪)、前立腺肥大等下部尿路に閉塞性疾患(症状の増悪)、低出生体重児・新生児(過敏等の重篤な反応があらわれるおそれ)	眼内圧亢進、甲状腺機能亢進症、狭窄性消化性潰瘍、幽門十二指腸通過障害、循環器系疾患、高血圧症、高齢者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人				d-マレイン酸クロルフェニラミンとして、通常、成人には1回2mgを1日1~4回経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	じん麻疹、血管運動性浮腫、枯草熱、皮膚疾患に伴うそう痒(湿疹・皮膚炎、皮膚そう痒症)、アレルギー性鼻炎、血管運動性鼻炎、感冒等上気道炎に伴うくしゃみ・鼻汁・咳嗽。

鼻炎用内服薬

製品群No. 69

ワークシートNo.42

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		D 薬用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果			
	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意す べき副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌				慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)				使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ
抗ヒスタミン成分	メキタジン	セスラン錠	ケミカルメディアーター拮抗作用、抗ヒスタミン作用、抗アレルギー作用	併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ) 併用注意	中枢神経抑制剤・アルコール(眠気)、抗うつ剤・MAO阻害剤・アトロピン様作用を有する薬剤(口渇、排尿困難)、メキシサレン(光線過敏症)	肝機能障害・黄疸・血小板減少(頻度不明)	ショック、アナフィラキシー様症状(頻度不明)	0.1~5%未満(眠気、けん怠感、ふらふら感、口渇、胃部不快感)、0.1%未満(AST(GOT)、ALT(GPT)の上昇、血小板減少、頭痛、めまい、下痢、便秘、食欲不振、嘔吐、胃痛、腹痛、胸部苦悶感、心悸亢進、排尿困難、咽頭痛、浮腫、顔面潮紅、視網膜障害、月経異常、味覚異常、口内しびれ感)、頻度不明(黄疸)、自動車の運転等危険を伴う機械の操作。	0.1%未満(過敏症)		本剤の成分、フェノチアジン系化合物及びその類似化合物に対し過敏症の既往歴、緑内障(緑内障を悪化)、前立腺肥大等下部尿路に閉塞性疾患(排尿困難等)	腎障害、高齢者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、授乳婦、低出生体重児、新生児、乳児、幼児又は小児			過量投与で眠気、悪心、嘔吐、軽度の抗コリン作用性障害	他のフェノチアジン系化合物：長期投与又は大量投与により角膜・水晶体の混濁、網膜・角膜の色変沈着	1.通常成人1回メキタジンとして6mgを1日2回経口投与する。なお、年齢、症状に応じて適宜増減する。 2.通常成人1回メキタジンとして3mgを1日2回経口投与する。なお、年齢、症状に応じて適宜増減する。	1.気管支喘息、2.アレルギー性鼻炎、じん麻疹、皮膚疾患に伴う掻痒(湿疹・皮膚炎、皮膚そう痒症)
血管収縮成分	塩酸ブソイドエフェドリン	なし																

鼻炎用内服薬

製品群No. 69

ワークシートNo.42

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 薬用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化			
			併用禁忌(他 剤との併用により 重大な問題が 発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの					使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ				
血管収縮成分	塩酸フェニレフリン	ネオシネジンコーワ注号	塩酸フェニレフリンは選択的α ₁ 刺激薬である。	MAO阻害剤(MAO阻害薬で治療中又は治療後3週間以内の患者：血圧の異常上昇)、三環系抗うつ剤・分娩促進剤(本剤の作用が増強)			0.1～5%未満(胸内苦悶、呼吸困難、頭痛、悪心・嘔吐、手足のしびれ感、手足のふるえ感、紅疹)、頻度不明(心悸亢進、徐脈、血圧異常上昇、発汗)	頻度不明(過敏症)		原則禁忌：心室性頻拍(症状を悪化)・本剤の成分過敏症の既往歴	高血圧、重篤な動脈硬化症、甲状腺機能亢進症、高齢者、心疾患、徐脈、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、低出生体重児、新生児、乳児、幼児又は小児			過量投与 徴候・症状：心室性期外収縮、一過性の心室性頻拍、頭重感、手足の疼痛、脳出血、頭痛、肺水腫等の症状があらわれる。			〔皮下注射及び筋肉内注射〕通常成人1回2～5mgを皮下注射又は筋肉内注射する。なお、年齢、症状により適宜増減するが、その範囲は1～10mgとし、初回量は5mgを超えないこと。また、反復投与を行う場合には、10～15分おきに行うこと。 〔静脈内注射〕通常成人1回0.2mgを注射液そのまま、又は約10mLの生理食塩液、リンゲル液、若しくは5%ブドウ糖液等に混入して静脈内注射する。なお、年齢、症状により適宜増減するが、その範囲は0.1～0.5mgとする。また反復投与を行う場合には10～15分おきに行うこと。 〔点滴静脈内注射〕100mLの血液、リンゲル液又は5%ブドウ糖液等に対し、0.5～1.0mgの割合で混入し、血圧を測定しながら滴数を加減して点滴静注する。 〔局麻時の作用延長〕通常、20mLの局所麻酔剤に対して1mgの割合で混入して使用する。 高齢者減量	〔皮下注射及び筋肉内注射〕通常成人1回2～5mgを皮下注射又は筋肉内注射する。なお、年齢、症状により適宜増減するが、その範囲は1～10mgとし、初回量は5mgを超えないこと。また、反復投与を行う場合には、10～15分おきに行うこと。 〔静脈内注射〕通常成人1回0.2mgを注射液そのまま、又は約10mLの生理食塩液、リンゲル液、若しくは5%ブドウ糖液等に混入して静脈内注射する。なお、年齢、症状により適宜増減するが、その範囲は0.1～0.5mgとする。また反復投与を行う場合には10～15分おきに行うこと。 〔点滴静脈内注射〕100mLの血液、リンゲル液又は5%ブドウ糖液等に対し、0.5～1.0mgの割合で混入し、血圧を測定しながら滴数を加減して点滴静注する。 〔局麻時の作用延長〕通常、20mLの局所麻酔剤に対して1mgの割合で混入して使用する。 高齢者減量	各種疾患若しくは状態に伴う急性低血圧又はショック時の補助治療、発作性上室頻拍、局所麻酔時の作用延長

鼻炎用内服薬

製品群No. 69

ワークシートNo.42

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果				
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	濫用に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるおそれ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化				
		併用禁忌(他 剤との併用により 重大な問題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ			
副交感神経遮断成分	ベラドンナ総アルカロイド	硫酸アトロピン	ムスカリン性アセチルコリン受容体に対する競合的遮断薬	抗コリン作用を有する製剤(三環系抗うつ剤・フェノチアジン系薬剤・イソニアジド・抗ヒスタミン剤等を経口剤として用いる場合)[相加的に抗コリン作用増強]、MAO阻害剤(経口剤として用いる場合)[抗コリン作用増強]、強心配糖体製剤(経口剤として用いる場合)[強心配糖体製剤の毒性を増強]、眼科用剤:三環系抗うつ剤、フェノチアジン系薬剤、抗ヒスタミン剤(本剤の作用増強)	経口剤:頻度不明(散瞳、視調節障害、緑内障、口渇、悪心・嘔吐、瞳孔散大、便秘、排尿障害、頭痛、頭重感、記憶障害、心悸亢進、呼吸障害、顔面潮紅)、眼科用剤:頻度不明(瞳孔散大、眼圧上昇、血圧上昇、心悸亢進、幻覚、痙攣、悪心・嘔吐、口渇、便秘、顔面潮紅、頭痛、発熱)、視調節障害・麻痺、散瞳のため自動車運転等危険を伴う機械の操作	経口剤:頻度不明(過敏症)、眼科用剤:頻度不明(アレルギー性結膜炎、眼結膜炎)	経内臓(病状の悪化)、前立腺肥大による排尿障害(症状の悪化)、麻痺性イレウス(症状の悪化)、本剤に対し過敏症の既往歴、眼科用剤:経内臓および眼隅角や前房が浅いなどの眼圧上昇の素因(急性閉塞隅角緑内障の発作)	前立腺肥大、うつ血心性不全、重篤な心疾患、潰瘍性大腸炎、甲状腺機能亢進症、高温環境、高齢者、妊婦、授乳婦、小児・乳児(眼科用剤では全身副作用が起こりやすい)					(眼科用剤)長期にわたり散瞳していると虹彩が癒着	経口剤:硫酸アトロピンとして、通常、成人1日1.5mgを3回に分けて経口投与、非薬物性パーキンソニズムの場合には、硫酸アトロピンとして、通常、成人最初1日0.5~1mgを3回に分けて経口投与し、以後漸次増量。眼科用剤:硫酸アトロピンとして、通常、0.5~1%液を1日1~3回、1回1~2滴ずつ点眼	経口剤:胃・十二指腸潰瘍における分泌ならびに運動亢進、胃腸の痙攣性疼痛、痙攣性便秘、胆管・尿管の痙攣、有機リン系殺虫剤・副交感神経興奮剤の中毒、迷走神経性徐脈及び迷走神経性房室伝導障害、夜尿症、その他の徐脈及び房室伝導障害、非薬物性パーキンソニズム、麻酔前投薬、眼科用剤:診断または治療を目的とする散瞳と調節麻痺
消炎酵素成分	塩化リゾチーム	レフトーゼ錠	抗炎症作用:痙攣形成・組織修復作用:膿粘液の分解と排出作用:出血抑制作用	ショック、アナフィラキシー様症状・SJS症候群・Lyell症候群(頻度不明)	0.1~5%未満(下痢、胃部不快感、悪心・嘔吐、食欲不振)、0.1%未満(口内炎等)、頻度不明(肝機能障害(AST(GOT)、ALT(GPT)、Al-P、γ-GTP、LDHの上昇等、めまい)	0.1%未満(過敏症)	本剤の成分過敏症の既往歴、卵白アレルギー(アナフィラキシー・ショックを含む過敏症状)	アトピー性皮膚炎、気管支喘息、薬剤アレルギー、食物アレルギー等のアレルギー性素因、両親、兄弟等がアレルギー性素因の既往歴、高齢者				作用機序は解明されていない点も多く、用量・効果の関係も必ずしも明らかでないため、漫然と投与しない。	1.慢性副鼻腔炎の腫脹の緩解、痙の切れが悪く、喀出回数が多い気管支炎、気管支拡張剤の喀痰排出困難、小手術時の術中術後出血の場合、通常、成人は1日塩化リゾチームとして、60~270mg(力価)を3回に分けて経口投与する。2.歯槽膿漏症(炎症型)腫脹の緩解の場合、通常、成人は1日塩化リゾチームとして、180~270mg(力価)を3回に分けて経口投与する。高齢者減量	1.慢性副鼻腔炎の腫脹の緩解、痙の切れが悪く、喀出回数が多い気管支炎、気管支拡張剤の喀痰排出困難、小手術時の術中術後出血(歯科、泌尿器科領域)の場合、通常、成人は1日塩化リゾチームとして、180~270mg(力価)を3回に分けて経口投与する。2.歯槽膿漏症(炎症型)腫脹の緩解の場合	

鼻炎用内服薬

製品群No. 69

ワークシートNo.42

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果		
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ			長期使用に よる健康被 害のおそれ	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化
消炎 酵素成 分	セラベプター ゼ	ダーゼン5 mg錠	抗腫脹作用 ・粘液・膿汁 の融解・排泄 促進作用		抗凝血剤(抗凝血剤の作用 が増強)	間質性肺炎、 PIE症候群、 AST(GO T)、ALT(G PT)の上昇 等を伴う肝機 能障害、黄疸 (0.1%未 満)	皮膚粘膜眼 症候群(Stev ens-John son症候群) 及び中毒性 表皮壊死症 (Lyell症候 群)、ショク ク、アナフィ ラキシー様症 状(0.1%未 満)	0.1~5% 未満(食欲不 振、胃部不快 感、悪心、嘔 吐)、0.1% 未満(下痢、 鼻出血、血尿 等の出血傾 向)	0.1~5% 未満(過敏症)		本剤の成分過敏 症の既往歴	薬物過敏症の既往 歴、血液凝固異 常、重篤な肝障害 又は腎障害					作用機序は 解明されてい ない点も多 く、用量・効 果の関係も 必ずしも明ら かにされてい ないので、漫 然と投与しな い。	セラベプターゼとして、通 常成人1日15~30mgを 1日3回に分けて毎食後に 経口投与する。なお、年 齢・症状に応じて適宜増減 する。製剤別の通常成人 用法・用量は次のとおりで ある。 ◇ダーゼン5mg錠:1回1 ~2錠宛、1日3回毎食後 に経口投与 ◇ダーゼン10mg錠:1回 1錠宛、1日3回毎食後に 経口投与 ◇ダーゼン顆粒1%:1回 0.5~1g宛、1日3回毎 食後に経口投与 本剤の体内での作用機序 はなお解明されていない 点も多く、また、用量・効果 の関係も必ずしも明らか にされていない。従って漫 然と投与すべきでない。	手術後及び 外傷後、慢性 副鼻腔炎、乳 汁うっ滞(乳房 マッサージ及 び搾乳を行っ ている場合)の 症状の腫脹の 緩解 ・気管支炎、肺 結核、気管支 喘息時の喀痰 咯出困難 ・麻酔後の喀 痰咯出困難
抗 炎症成 分	グリチルリチ ン酸二カリウ ム	点眼のみな ので、グリチ ルリチン酸 モノアンモニ ウム:グリチ ロン注一号 を使用	抗炎症作用		ループ利尿剤・チアジド系お よび その類似降圧利尿剤 (低カリウム血症)、甘草(偽 アルドステロン症)	偽アルドステ ロン症(頻度 不明)、横紋 筋融解症(グ リチルリチ ン酸または甘 草を含有する 製剤)				偽アルドステロ ン症、ミオパシー、低 カリウム血症(低カ リウム血症、高血 圧症等を悪化)		高齢者、妊婦小児 等				長期運用に より偽アルド ステロン症	グリチルリチンとして、通 常成人1日1回40mgを皮下 注射する。なお、年齢、症 状により適宜増減する。	薬疹	

鼻炎用点鼻薬

製品群No. 70

ワークシートNo.43

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		D 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	I 用法用量	J 効能効果
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ				薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)			
			併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生 するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの				使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ		
血管収縮成分	塩酸テトラヒドロゾリン	ABCスプレー点鼻薬、塩酸塩が無く、硝酸塩を使用	直接局所粘膜に適用すれば粘膜の充血、腫脹を除去する。	モノアミン酸化酵素阻害剤(急激な血圧上昇)			頻度不明(頻眼、頭痛、めまい、悪酔、不眠症、脱力感、血圧上昇、心悸亢進、不整脈、熱感、刺激痛、乾燥感、反応性充血、鼻漏、長期使用で反応性の低下等)	頻度不明(過敏症)	・本剤に対し過敏症の既往歴・2歳未満の幼児・乳児(全身症状)・モノアミン酸化酵素阻害剤を投与中(急激な血圧上昇)	冠動脈疾患、高血圧症、甲状腺機能亢進症、糖尿病、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、小児	適用又は頻回使用により反応性の低下や局所粘膜の二次充血を起すこととあるので、急性充血期に限り使用するか又は適切な休薬期間をおいて使用すること。		適用又は頻回使用により反応性の低下や局所粘膜の二次充血を起すこととあるので、急性充血期に限り使用するか又は適切な休薬期間をおいて使用しないこと。	適用又は頻回使用により反応性の低下や局所粘膜の二次充血を起すこととあるので、急性充血期に限り使用するか又は適切な休薬期間をおいて使用しないこと。	本剤は原則として6歳以上の小児及び成人に用いる。通常、成人3～5時間毎に2～3回鼻腔内に噴霧するか、又は2～4滴を鼻腔内に点鼻する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	上気道の諸疾患の充血・うっ血
	塩酸ナファゾリン	0.05%プリピナ液(チバ)、塩酸ナファゾリンの配合剤しかなかったため、硝酸ナファゾリンの点鼻薬を用いた	血管平滑筋のα-アドレナリン受容体に直接作用して血管を収縮させる。アドレナリンより強い末梢血管収縮作用を有し、作用持続時間も長い(ウサギ耳動脈血管)。	MAO阻害薬(急激な血圧上昇)			・頻度不明(眩暈等の鎮静作用(特に小児)、神経過敏、頭痛、めまい、不眠症、血圧上昇、悪心・嘔吐、熱感、刺激痛、乾燥感、嗅覚消失、反応性充血、長期投与で顆粒球減少・反応性の低下)	頻度不明(過敏症)	・本剤の成分に対し過敏症の既往歴、2歳未満の乳・幼児(ショック)、MAO阻害剤の投与を受けている(急激な血圧上昇)	冠動脈疾患、高血圧症、甲状腺機能亢進症、糖尿病、交感神経作用薬による不眠、めまいなどの既往、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、小児	適用又は頻回使用により反応性の低下や局所粘膜の二次充血を起すこととあるので、急性充血期に限り使用するか又は適切な休薬期間をおいて使用すること。		眼科用として使用しないこと。過量投与により、主として全身作用として、血圧上昇と二次作用として臓器虚血がみられる。幼・小児では過量投与により、顕著な鎮静があらわれ、発汗、徐脈、昏睡等の全身症状があらわれやすい。適用・頻回投与により顆粒球減少、反応性の低下、局所粘膜の二次充血を起すことがある。	通常、成人鼻腔内には、1回2～4滴を1日数回、咽喉・喉頭には1回1～2mLを1日数回塗布又は噴霧する。なお、年齢、症状により適宜増減する。局所麻酔剤への添加には、局所麻酔剤1mLあたり0.05%液2～4滴の割合で添加する。	上気道の諸疾患の充血・うっ血、上気道粘膜の表面麻酔時における局所麻酔剤の効力持続時間の延長	
	塩酸フェニレフリン	ネオシネジンコーフ5%点眼液、点鼻薬が無く点鼻薬を使用	塩酸フェニレフリンは選択的α1受容体刺激作用薬である。健康成人における散瞳は迅速であり、また、通常5～6時間で正常に復	MAO阻害薬(急激な血圧上昇)、三環系抗うつ薬(急激な血圧上昇)、シクロプロパン、ハロタンなどで全身麻酔する前には、本剤の投与を休止する			頻度不明(結膜炎、眼圧上昇、血圧上昇)自動車の運転等危険を伴う機種の操作には従事させない。	頻度不明(過敏症)	狭胸角や前房が浅いなどの眼圧上昇の素因(急性閉塞隅角緑内障の発作)	高血圧症、動脈硬化症、冠不全または心不全などの心臓疾患、糖尿病または甲状腺機能亢進症、小児、高齢者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人			長期にわたる散瞳は虹彩が癒着するという報告がある(点眼の注意)	通常1回、1～2滴点眼する。	診断または治療を目的とする散瞳	
抗ヒ	塩酸イプロヘプテン	なし														

鼻炎用点鼻薬

製品群No. 70

ワークシートNo.43

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果		
		併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			重篤ではないが、注意す べき副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ				適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 換えるおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)
スタ タ ミ ン 成 分	外用がない のでポラミ 錠2mgを 使用	抗ヒスタミン 作用		中枢神経抑制剤・アルコ ール・MAO阻害剤・抗コリン作 用を有する薬剤(相互に作用 を増強)、ドロキシドパ、ノル エピネフリン(血圧の異常上 昇)	虚脱・錯乱・ 再生不良性 貧血・無顆粒 球症(頻度不 明)	ショック(頻度 不明)	5%以上又は 頻度不明(鎮 静、神経過 敏、頭痛、焦 燥感、複視、 眠気、不眠、 めまい、耳 鳴、前庭障 害、多幸症、 情緒不安、ヒ ステリー、振 戦、神経炎、 協調異常、感 覚異常、霧 視、口渇、胸 やけ、食欲不 振、悪心、嘔	5%以上又は 頻度不明(過 敏症)		本剤の成分又は 類似化合物に対し 過敏症の既往歴、 瞳孔障(増悪)、前 立腺肥大等下部 尿路に閉塞性疾 患(増悪)、低出生 体重児・新生児(虚 脱等の重篤な反応 があらわれるおそ れ)	眼内圧亢進、甲状 腺機能亢進症、狭 窄性消化性潰瘍、 幽門十二指腸通過 障害、循環器系疾 患、高血圧症、高 齢者、妊婦又は妊 娠している可能性 のある婦人					0.4-マレイン酸クロロフェニ ラミンとして、通常、成人に は1回2mgを1日1~4回経 口投与する。なお、年齢、 症状により適宜増減する。	じん麻疹、血 管運動性浮 腫、枯草熱、皮 膚疾患に伴う そう痒(湿疹・ 皮膚炎、皮膚 そう痒症、薬 疹)、アレルギー 性鼻炎、 血管運動性鼻 炎、感冒等上 気道炎に伴う しやみ・鼻汁・
抗 ア レ ル ギ ー 成 分	クロモグリク 酸ナトリウム 点鼻液	インター ル	抗原抗体反 応に伴って起 こるマスト細 胞からの化学 伝達物質(ヒ スタミン等)の 遊離を抑制す ることによっ てアレルギー 性鼻炎の発 現を防止す る。また、ヒト 末梢静脈血 由来の炎症 性細胞(好酸 球、好中球、 単球)の活性 化に対して抑 制作用をも つ。		アナフィラキ シー様症状 (0.1%未満)		0.1~5%未満 (鼻内刺激 感)0.1%未満 (鼻出血、頭 痛)	0.1%未満(過 敏症)	本剤の成分に対し 過敏症の既往歴	妊婦又は妊娠して いる可能性のある 婦人					噴霧吸入させる こと。内服しても 効果は得られな い。	1日6回(起床時、日中約3 時間ごとに4回、就寝前)、 1回各鼻腔に1噴霧(クロモ グリク酸ナトリウムとして 2.6mg)ずつ噴霧吸入する。 症状の緩解が得られれ ば、その後の経過を観察 しながら減量すること。	アレルギー性 鼻炎

鼻炎用点鼻薬

製品群No. 70

ワークシートNo.43

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 薬用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化		用法用量	効能効果
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を換えるおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化			
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	頻度不明(過敏症)					使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
殺菌成分	塩化ベンザルコニウム	0.1w/vxチアミトール水	*本剤は使用濃度において、栄養型細菌(グラム陽性菌、グラム陰性菌)、真菌等には有効であるが、結核菌及び大部分のウイルスに対する殺菌効果は期待できない。イオン界面活性剤であるので、表面張力を低下させ、清浄作用、乳化作用等を示す。*作用機序は、陰電荷を帯びる細菌に陽電荷を帯びる塩化ベンザルコニウムが菌体表面に吸着・集積され、菌体たん白を変性させ殺菌作用をあらわす。							粘膜炎、創傷面または炎症部位に長期間または広範囲に使用しないこと				原液は皮膚・粘膜炎に付着及び眼に入らないように注意する(刺激性がある)。*炎症または易刺激性の部位(粘膜、陰股部等)への使用:正常の部位への使用より低濃度とすることが望ましい。また、使用後は滅菌精製水で水洗する。*深い創傷または眼に使用する希釈水溶液は、調製後滅菌処理すること。*経口投与しないこと。洗眼には使用しないこと。*密封包装、ギプス包装、パックに使用すると刺激症状があらわれることがあるので、使用しないことが望ましい。				効能・効果:用法・用量(塩化ベンザルコニウム濃度)①手指・皮膚の消毒:通常石けんで十分に洗浄し、水で石けん分を十分に洗い落とし、塩化ベンザルコニウム0.05~0.1%溶液に浸して洗い、滅菌ガーゼあるいは布片で清拭する。術前の手洗の場合には、5~10分間ブラッシングする。②手術部位(手術野)の皮膚の消毒:手術前局所皮膚面を塩化ベンザルコニウム0.1%溶液で約5分間洗い、その後塩化ベンザルコニウム0.2%溶液を塗布する。③手術部位(手術野)の粘膜の消毒、皮膚・粘膜の創傷部位の消毒:塩化ベンザルコニウム0.01~0.025%溶液を用いる。④感染皮膚面の消毒:塩化ベンザルコニウム0.01%溶液を用いる。⑤医療用具の消毒:塩化ベンザルコニウム0.1%溶液に10分間浸漬するか、または厳密に消毒する際は、器具を予め2%炭酸ナトリウム水溶液で洗い、その後塩化ベンザルコニウム0.1%溶液中で15分間煮沸する。⑥手術室・病室・家具・器具・物品などの消毒:塩化ベンザルコニウム0.05~0.1%溶液を布片で塗布・清拭するか、または噴霧する。⑦随時洗浄:塩化ベンザルコニウム0.02~0.05%溶液を用いる。⑧結膜囊の洗浄・消毒:塩化ベンザルコニウム0.01~0.05%溶液を用いる。*炎症または易刺激性の部位(粘膜、陰股部等)への使用:正常の部位への使用より低濃度とすることが望ましい	

鼻炎用点鼻薬

製品群No. 70

ワークシートNo.43

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果
	評価の視点	薬理作用		相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				
				併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの						使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ		
殺菌成分	塩化ベンゼ ニウム	ハイアミン 液、塩化ベ ンゼニウム 10w/v%	芽胞のない細菌、真菌類に 広く抗菌性を 有し、グラム 陽性菌には 陰性菌よりも 低濃度で効果 を示す。一方、結核菌及び大部分の ウイルスに対する殺菌効果は期待できない						頻度不明(過敏症)						・原液は皮膚・粘膜に付着及び眼に入らないように注意する。・炎症または易刺激性の部位(粘膜、陰股部等)への使用時は低濃度・経口投与しないこと。・密封包装、ギプス包帯、バックに使用すると刺激症状があらわれることがあるので、使用しないことが望ましい。・深い創傷又は眼にしようする場合は希釈液は注射用蒸留水か滅菌精製水を使用	全身吸入による筋脱力をおそれるので、粘膜炎、創傷面又は炎症部位に長時間又は広範囲に使用しない。		①通常石けんで十分に洗浄し、水で石けん分を十分に洗い流した後、塩化ベンゼニウム0.05~0.1%溶液(本剤の100~200倍希釈液)に浸して洗い、滅菌ガーゼあるいは布片で拭拭する。術前の手洗の場合には、5~10分間ブラッシングする②手術前局所皮膚面を、塩化ベンゼニウム0.1%溶液(本剤の100倍希釈液)で約5分間洗い、その後塩化ベンゼニウム0.2%溶液(本剤の50倍希釈液)を塗布する③塩化ベンゼニウム0.01~0.025%溶液(本剤の400~1,000倍希釈液)を用いる④塩化ベンゼニウム0.01%溶液(本剤の1,000倍希釈液)を用いる⑤塩化ベンゼニウム0.025%溶液(本剤の400倍希釈液)を用いる⑥塩化ベンゼニウム0.02%溶液(本剤の500倍希釈液)を用いる⑦塩化ベンゼニウム0.1%溶液(本剤の100倍希釈液)に10分間浸漬するか、またはは厳密に消毒する際には、器具を予め2%炭酸ナトリウム水溶液で洗い、その後塩化ベンゼニウム0.1%溶液(本剤の100倍希釈液)中で15分間煮沸する⑧塩化ベンゼニウム0.05~0.2%溶液(本剤の50~200倍希釈液)を布片で塗布・拭拭するか、または噴	①手指・皮膚の消毒②手術部位(手術野)の皮膚の消毒③手術部位(手術野)の粘膜の消毒、皮膚・粘膜の創傷部位の消毒④感染皮膚面の消毒⑤陰洗浄⑥結膜のうの洗浄・消毒⑦医療用具の消毒⑧手術室・病室・家具・器具・物品などの消毒

鼻炎用点鼻薬

製品群No. 70

ワークシートNo.43

リスクの程度 の評価	評価の視点	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化) につながるおそれ		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果
		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化				
				併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの						薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	使用量(上 限があるもの)		過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ		
抗 炎 成 分	グリチルリチ ン酸二カリウ ム	ノイボルミン、点鼻薬 がなかった ため、点眼 薬の添付文 書を使用	抗アレルギー 作用、角膜上 皮再生促進 作用を有する					強度不明(眼 の刺激感)	強度不明(過 敏症)							点眼用のみ使 用			通常、1回2～3滴を1日5 ～6回点眼する。なお、症 状により適宜増減する。	アレルギー性 結膜炎

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 差用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果					
評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		薬理に基づき 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果	
		併用禁忌(他 剤との併用により 重大な問題が 発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの					薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	使用量に上 限があるもの				過量使用・誤使 用のおそれ
フェノール	フェノール	本剤は、使用 濃度において グラム陽性 菌、グラム陰 性菌、結核菌 には有効であ るが、芽胞 (炭疽菌、破 傷菌等)及び 大部分のウ イルスに対 する効果は期 待できない。									・原液または濃 度液が皮膚に付 着した場合には 痛感及び吸収さ れ、中毒症状を 起こすことがある ・眼に入らないよ うに注意すること。 ・本剤は必ず希 釈し、濃度に注 意して使用する こと。 ・炎症または易 刺激性の部位に 使用する場合は 、濃度に注意し て正常の部位 に使用するよりも 低濃度とすること が望ましい。 ・外用にのみ使 用すること。 ・密封包帯、ギブ ス包帯、パックに 使用すると刺激 症状及び吸収さ れ、中毒症状が あらわれるおそ れがあること。 ・長期間または 広範囲に使用し ないこと。[吸収 され、中毒症状 を起こすおそれ がある。] ・顔軟を避けるた め、保管及び取 扱いには十分注 意すること。			・長期間に使 用しないこ と。(中毒症状 の発現のお それ。)	・機能・効果 用法・用量(本 品希釈倍数) ・手指・皮膚の消毒:フェ ノールとして1.5~2%溶液 を用いる。(50~67倍) ・医療用具、手術室・病室・ 家具・器具・物品などの消 毒:フェノールとして2~ 5%溶液を用いる。(20~ 50倍) 排泄物の消毒:フェノール として3~5%溶液を用い る。(20~33倍) 下疳疾患の鎮痒 痒疹(小児ストロフルスを 含む)、じん麻疹、虫さされ 液: フェノールとして1~2%溶 液を用いる。(50~100倍) 軟膏:フェノールとして2~ 5%軟膏を用いる。(20~ 50倍)	
アミノ安息香 酸エチル	アミノ安息香 酸エチル軟 膏「マルイ ン」を使用				過敏症		本剤に対し過敏症 の既往歴			眼には使用しな いこと。			適宜患部に使用する。	下記疾患にお ける鎮痛・鎮痒 外傷、熱傷、 日焼け、皮膚 潰瘍、そう痒 症、痔疾		

点耳薬

製品群No. 71

ワークシートNo.44

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果			
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	濫用に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の 症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの			使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ		
塩酸プロカイ ン	塩酸プロカ イン注「ホ エイ」 局所麻酔に 類似のため 使用	合成局所麻 酔薬の原型 であり、感覚 求心神経線 維のNa+チャ ネルを遮断 し、活動電位 の伝導を抑制 することにより局所麻酔 作用を発現する。粘膜への 浸透性が悪いので表面麻 酔としては無効である。代 謝産物が血管拡張作用 を有し、速やかに吸収され るのでエピネフリンの添加 が必要である。		振せん、痲れ ん等の中毒 症状(頻度不 明)	ショック(頻度 不明)	頻度不明(お むけ、不安、 興奮、霧視、 めまい、悪 心・嘔吐、メ ヘモグロビン 血症)	頻度不明(過 敏症)	重篤な出血や ショック状態(腎 臓、硬膜外麻酔 時：症状が悪化)、 注射部位またはその 周辺に炎症(腎 臓、硬膜外麻酔 時：効果が急激に 発現)、敗血症の 患者(腎臓、硬膜 外麻酔時：敗血症 性の髄膜炎がおこ るおそれ)、メヘモ グロビン血症(腎 臓麻酔を除く) (症状が悪化する おそれ)、本剤また は安息香酸エステル (コカインを除く) 系局所麻酔薬に 対し過敏症の既往 歴	高齢者、妊婦また は妊婦している可 能性のある婦人、 妊娠末期の婦人				使用に際し、目的濃度の 水性注射液として使用する。 脊髄麻酔(腰髄麻酔) 5~10%注射液とし、通常、 成人には塩酸プロカイン として、低位麻酔には50 ~100mg、高位麻酔には 150~200mgを使用する。 硬膜外麻酔 (基準最高用量:1回 600mg)1.5~2%注射液とし、 通常、成人には塩酸プロカ インとして、200~ 400mgを使用する。 伝達麻酔 (1~2%注射液とし、通常、 成人には塩酸プロカイン として、10~400mgを使用 する。 浸潤麻酔 (基準最高用量:1回 1,000mg)0.25~0.5%注 射液とし、通常、成人には 塩酸プロカインとして、1回 1,000mgの範囲内で使用 する。歯科領域麻酔 2%注射液にエピネフリン を添加したものをを用い、 伝達麻酔、浸潤麻酔に は、通常、成人には塩酸 プロカインとして、10~100mg を使用する。 ただし、年齢、麻酔領域、 部位、組織、症状、体質に より適宜増減する。 必要に応じてエピネフリン (通常濃度1:10万~20万) を添加して使用する。	脊髄麻酔(腰 髄麻酔)、硬 膜外麻酔、伝 達麻酔、浸 潤麻酔、歯 科領域に おける伝達 麻酔・浸潤 麻酔
アクリノール 液	アクリノール 液	グラム陽 性、陰性に 有効で、特に 連鎖球菌、 ウェルシュ 菌、ブドウ球 菌、淋菌に対 し、静菌及び 殺菌作用が ある。作用機 序は、生体で アクリジニウ ムイオンとな り細胞の呼吸 酵素を阻害す るといわれて いる。				頻度不明(炎 布部の疼痛、 発赤、腫脹等 潰瘍、壊死)	頻度不明(過 敏症)			大量服用時 には、悪心、嘔 吐、下痢、肝 機能障害・外 用のみ使用し 、内服しないこと			0.05~0.2w/v%の液として 使用する。	化膿局所の消 毒、泌尿器・産 婦人科術中術 後、化膿性疾 患(せつ、よう、 扁桃炎、副鼻 腔炎、中耳炎)
メントール	内服のみ													